
草原の流星

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の流星

【Nコード】

N7098K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

『帰ったら一番に母さんへ言っんだ』
喉はカラカラに渴いている。言葉が出ない。少年の顔と声が脳裏で回る。

『ただいまって』

澄んだ風の匂いがした。

わたしはようやく拓けた視界に、安堵の溜め息を吐く。涙の跡は生々しく頬に残っているものの、折れた心は少しずつだが回復しつつあった。

右手に握りしめていたロケットペンダントを首からかける。仄かに温もりを感じる。

何日もかけてここまで来た。知らない道をひたすら歩いた。ただ、少年の思い出だけを追ってここまで来た。

『深い森は死者の国にも繋がっているから、注意して進まなければいけない。森は深く、人を惑わす』

そのとおりだった。何度、常時霧が立ち込める森の中、迷いそうになったことだろう。

『そして、やっとの思いで森から抜け出したら、一面草原が広がっている。幼い子らは草原で駆けずり回っていて、笑い声が絶えない』

眼前にある風景は、少年が口にした風景そのものだ。果てない草原で、馬に跨がった子供達が太陽の下、笑っている。

『草原を歩いていくと、テントがたくさん張つてある区域がある。』

草原の民の集落だ。薄汚れたテントの合間では他愛のない話が繰り広げられていて、武具屋の親爺さんが大きな声で客引きしている』

ちょうど昼時に集落へ辿り着いた。活気あるその集落は、異民であるわたしをすんなりと中へ通してくれた。世界を回る旅人が立ち寄ることも多々あるらしい。国境にあることも相まって、たくさんの人々が入り出るのであると集落　いや、村と言った方が的確だろう　に住む人が教えてくれた。

少年が小さく笑って話したように、武具屋の親爺さんは大声で客寄せしている。

『話しかけてくる集落の人々を掻き分け、一番大きなテントの右横にあるテントの前へ立つ。何て言おうか考え込むが、美味しそうなごった煮スープの匂いに我慢しきれなくなって、中へと飛び込む』
ずっと物を食べていなかったわたしは、そのテントの扉代わりに使われている幾何学模様の布の隙間より流れてくるスープの匂いに、唾液が溢れてくるのを感じた。

気配を感じ取ったのだろう、中から中年の女性が顔を覗かす。

『帰ったら一番に母さんへ言っんだ』

喉はカラカラに渴いている。言葉が出ない。少年の顔と声が脳裏で回る。

『ただいまって』

わたしは少年の母親に深々と頭を下げ、首からぶら下げていた少年からの預かり物であるロケットペンダントを突き出した。

「護りきれなくて、ごめんなさい」

開口一番飛び出したのは、その言葉だった。

両肩に少しだけ重みが加わる。控え目に顔を上げると、穏やかな微笑を浮かべた少年の母親が小さく首を傾げた。目には涙が滲んでいる。

「ラマンダは、草原の民として……いいえ、草原の戦士として最後まで戦い抜いたでしょうか」

「はい……っ」

少年の鮮烈な最後を思い出し、止まっていた涙が零れる。嗚咽が堪えられない。

「あの子は 我々が知り得るどの戦士よりも、勇猛果敢に戦い、命を賭して国を守ってくれました。わたしは、ラマンダの上司として、誇りに……。誇りに……」

言葉が続かない。

誇りに思う、という他人行儀な言葉になど出来るわけがなかった。護りたかった。出来ることなら、生きて故郷であるこの地を踏ませてやりたかった。

いつだって、国を守るために徴集されたことを愚痴らず、懸命に精進する彼はわたしを励ましてくれていたから。

ラマンダは、反乱軍に圧されてもう後がなくなっただけの部隊を救うため、自ら爆薬を纏って単身、敵陣へ突っ込んだ。白い光が目刺激したと思ったら、破裂音と共に反乱軍は炎に吞まれた。

苦い記憶はわたしを苛み、それ以来、戦場へ赴くことが出来ない。「あなたみたいな人と巡り逢えて、ラマンダは幸せだったでしょう。あたしにはわかります。あの子は国を守りたいという気持ちは強かったけど、命に替えてでも守るのは大切な人だとキチンと理解していた。あたしの自慢の息子は、隊長さんを愛していたんでしょうね」「え……？」

思わず眉根を寄せた。ラマンダとわたしが恋仲だとは、一言も喋っていないにも関わらず、彼の母親は難なくそれを当てて見せた。彼女ははまだ私が突き出したままのロケットペンダントを指差す。「それは代々、あたし達の家に伝わる婚礼道具。一緒になろうと決めた相手に渡すんです」

わたしはそれを聞いた途端、力なく地面にへたり込んだ。

女だからと侮られたなくて、日々修行を重ねた。男を好きになることさえ自ら戒め、泥水を飲んでようやく隊長職へ就任した。そんな時、ラマンダと出会ってしまい、導かれるように恋に落ちた。

「……わたしは、ラマンダを今でも愛しています」

ラマンダのことだったら、些細なことさえ確実に記憶している。

鋼色の襟足が少し長い髪だとか、草原の色をした吊り上がった双眸だとか。笑うと左目の幅の方が右目より狭まるところだとか、武器作りが好きなところだとか、照れ屋なところだとか。

彼を命を奪ったのは、実質わたしである。わたしが反乱軍の根城への無謀な強硬突入を計画しなければ、尊い犠牲は出ずに済んだのだ。その計画によって反乱軍を制圧出来たため、国から栄誉をもらい、民から賛辞を受けても全く心は温かくなかった。

ラマンダの定位置であつたわたしの右隣は空いており、わたしの

心にも穴を開けた。

「あなたはラマンダの全身全霊愛した人。世を絶望して、自らを崩壊させないで。多分、このロケットペンダントをあたしに返して死ぬつもりだったろうけど……それはあたしが許しません」

凜とした声に息を呑んだ。

ラマンダの母親は意思の強い眼差しをこちらへ向けている。

「ラマンダのためにも生きて」

草原に寝転がり、空を仰いだ。凩いだ夜風がわたしの金の髪をさらう。わたしの長いストレートヘアを好きだとラマンダは言った。

胸が軋んだ。

空気が澄んでいるからだろう、星は溢れんばかりに夜空を埋め尽くしている。

『俺が故郷へ帰る時には、サファイアも連れて行く。この人が俺の愛する人だと母親や兄弟にも自慢するんだ』

夜、ベッドの中で内緒話のように何度もラマンダは話した。反乱軍を平定したらどうしたいか、何をするかを。

わたしはそれを想像して心躍らせていた。

「結局、一人で来ることになっちゃったよ」

自嘲する。

ラマンダ 流星の意を持った草原の戦士。

彼を失った絶望さえも愛しさに変えられる日が一刻も早く来るように、満天の星に願いを捧げた。眺^{まな}から涙が伝うのと同時に、蒼い流れ星が一筋流れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098k/>

草原の流星

2010年10月8日15時03分発行